
おとーさん（略） 悪者と七人の子供

呪理阿

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

おとーさん（略） 悪者と七人の子供

【Nコード】

N4297Z

【作者名】

呪理阿

【あらすじ】

もう一つのタイトルは『おおかみと七ひきの子やぎ 現代ver』でも、なんか違う。ってか、色々違う。思いつきすぎてすごいね。おとーさんはグム童話を読みながらぶつぶつと何か喋っている。その『ぶつぶつ……』を、詳しくしました。今回、長男は外出中、長女は受験勉強。次男次女は友達と遊ぶのに夢中なため、おとーさん一人でお送りします。つまり突っ込みが居ない。ボケパレードへご案内？ できたらいいなあ。

どうも、おとーさんです。

最近僕はあることをあきらめました。名前です。

どーせ言ったところでほっとかれるだけなんです。地面にの字でも書いときますよチクシヨー。

そんな悲しいおとーさんが一人、グム童話を読みながら呟くお話をどうぞ。

昔々、ではなくてつい最近の事。あるところに一人のおばちゃんがいきました。

このおばちゃんには三人の子供が居て、彼らが連れてくる四人の子供たちを含めた七人を、とても可愛がっておりました。

ある日の事、おばちゃんはスーパーの特売へ行つて、食べ物を安く！ 早く……ではないな。勝ち取って来ようと思いました。

そこで、七人の子供たちを皆呼び寄せて、宣言しました。

「いいかい、これから母ちゃんは戦場へ行つてくるからね」

「戦場？ おばちゃん、戦うの？ 大将討つの？」

どこでそんなことを覚えたのかはともかく、一番小さい子供が言いました。

それにおばちゃんは大きくうなずくと、

「そうだよ、スーパーの特売つてのあ、戦場なんだ！ ちくわと言う名の大將を討ち取って来るからね！」

いっぺん盛り上がった後、おばちゃんは子どもたちを見下ろして言いました。

「悪い奴に気をお付けよ。家へ入れたら最後、役に立たないもの売つてくる上に、お前たち皆さらわれてしまつかもしれないからね。

悪い奴は……ええと、が、頑張つて見分けな！」

子どもたちは気を付けして、さらに敬礼をすると、

『了解！ 閣下もお気をつけてー！』

そこでおばちゃんは大きくうなずいて敬礼を返し、安心して出かけていきました。

何で安心できたんだこのおばはん。

……それはともかく。

おばちゃんを送り出すと、子どもたちはこっそりゲーム機を出し、お菓子の袋を開けると、お菓子を食べながらゲーム対戦を始めました。これだから最近の子供は。

しばらくして、誰かが、家の戸を叩いて大きな声で言いました。

「開けてちょうだい、お母さんよ。皆に、お土産を買ってきたわよ」
子どもたちは顔を見合わせ、

『うわキモッ』

一番大きい子が言いました。

「おばちゃんはなあ、自分の事、あたしとかおばちゃんって言うんだぞー！」

二番目に大きい、おばちゃんの一番目の息子が、

「母ちゃんはなあ、そんな言葉遣いしないんだぜ！　ってか、オレはそんなおしとやかな母さん欲しかったよ！」

『開けてやらないよ！　悪者！』

そこで悪者は一度引き下がり、おばちゃんの事を調べてまた戻ってきました。

「開けな！　おばちゃんだよ！」

三番目に大きい子が言いました。

「おばちゃんは、もっと声太いんだよ！」

「ぎーんねーん、ま、気にすんなよー！」

四番目に大きい子、おばちゃんの二人目の息子がなぜか励ましてくれました。

悪者は腹から声を出して、

「おばちゃんだよー！」

と言いました。

三番目に小さい子、おばちゃんの子の三人目の息子が顔をあげて言いました。

「お母ちゃんだ！」

他の子どもたちもそれに続きます。

「ほんとだ！ お母ちゃんの声だ！」

「お帰りー！」

悪者は扉の外でほくそ笑み、続けて言いました。

「さあ！ 早く開けな！」

「はあーい！」

二番目に小さい子が、扉の前に駆けてきました。そして、

「でもでもー、声だけじゃあ分かんないなあ」

「どうしろってんだい？」

その子はずっとも可愛い、天使のような笑みを浮かべて言いました。

「おばちゃんはいつもケーキ買ってきてくれるよね！ デイリツモーネっていうお菓子屋さんの、一番大きいチョコレーイトケーキ！」

悪者は慌てて、そのチョコレーイトケーキを買いに走り出しました。

子どもたちはピースしあい、悪者が戻って来るのを待ちました。

「さあ！ 買ってきたよ！ 開けておくれ！」

一番小さい子が叫びました。

「そこに置いて！ おばちゃん、早くしないと、スーパーの特売終わっちゃうよ！ おばちゃんは最後の最後、本当に商品が無くなっちゃうまで残るでしょうっ？」

まだまだ続きます。

「それに、それに！ 今日BB弾、買ってくれるって言ったじゃない！ それをおばちゃんって証拠に見せてよ！」

どんな証拠だ、と突っ込むことも無く、悪者はまた走り出しました。

「こいつ、馬鹿だろ」

誰かが呟きました。そうです。悪者は馬鹿だったのです。

「さあさ、チョココレイトケーキ！ 食べようぜい！」

一番大きい子が扉を開けてケーキを回収すると、テーブルの上に置きました。

外では悪者が

「さあさ！ これでどうだい！」

と、本当にBB弾を買ってきて叫んでいる、かと思うと、

「ちよっとお前、何やってんだい！」

「げ」

『おばちゃん！ お帰りなさあーい！』

悪者はおばちゃんの華麗なキックで倒され、家の中に引きずり込まれました。

「おばちゃん、見てみて！ この悪者さんがケーキ買ってきてくれたんだ！」

二番目に小さい子が無邪気に笑って言います。

「ほら、BB弾も！」

一番小さな子がBB弾のピストルを自慢します。

おばちゃんは大きくうなずくと、

「よくやった！ 悪者、お前は見逃してやるよ。もうするんじゃないよ」

「お前等もな！」

悪者は少し湿った声で叫ぶと、逃げるように走り去っていきました。

「さあー、ちくわ、たっくさん買ってきたよ。ケーキと一緒に食べるとするかい」

そして彼等は、チョココレイトケーキにちくわを散りばめた、世にも不思議なおやつを食べたのです。

みんな満足。めでたしめでたし。

悪者にはなったらだめですよ。

「づうっ！」

あー、よく考えたら、四十過ぎのおっさんがグム童話なんて読みながらこんなこと一人呟いているのって……不気味じゃね？

(後書き)

あらすじを読まない派の方、でもって『おとーさんが語るお話』シリーズの他の話を読んでくださっている方へ。

おとーさんの子供達はこの時

長男(純) 外出中。ちなみに朝起きた時から会って無い。

長女(忍) 受験勉強。ちなみに彼女は中三。

次男(岳) 友達と遊んでいる。ちなみに猫探しをしているらしい。

次女(光) 友達と遊んでいる。ちなみに今日の朝ごはんは彼女が作った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4297z/>

おとーさん（略） 悪者と七人の子供

2011年12月14日22時53分発行